

“The Legend of Tchi-Niu”における「自立した女性」

Lafcadio Hearn, *Some Chinese Ghosts* を読む

川澄亜岐子

本発表では、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) による “The Legend of Tchi-Niu” (*Some Chinese Ghosts*, 1887) を取り上げ、そこに描かれた女性像を分析した。女性像はハーン研究の重要なテーマの一つであり、これまでに自己犠牲や利他精神というキーワードとともに、並外れた忍耐力や、それと表裏をなす強烈な執着心が女性像の特徴として指摘されてきた。これらの女性像は、ハーンが幼くして生き別れた母親を恋い慕う気持ちや、彼の好意的な日本評価と結びつけられ、先行研究の豊富な蓄積がある。だが、その大半は来日以後の作品に登場する女性に関するものであり、来日以前の作品については一部を除いてほとんど言及が見られない。“The Legend of Tchi-Niu”に登場する女性には、来日以後の作品の女性たちには見られない特徴が認められる。本発表では、同作の女性像を分析したうえで、その背景にハーンのどのような考えがあったのかを彼が同時代に著した新聞記事に探った。

“The Legend of Tchi-Niu”は、フランス語の原話である« 福祿随之 Le bonheur et les emplois l’accompagnent » (*Le livre des recompenses et des peines*, traduit par Stanislas Julien, Paris: The Oriental Translation Fund of Great Britain and Ireland, 1835. 以下、原話①とする)と、英語の原話である“Super Natural Wife” (*Strange Stories from a Chinese Studio*, translated by Herbert A. Giles, London: Thos. De La Rue & Co., 1880. 以下、原話②とする)に基づいている。いずれも中国語で書かれた書物の翻訳で、前者の原典は道教の経典である『太上感應篇』、後者は17世紀に編まれた怪異小説集の『聊齋志異』である。両者は、人間の男性が超自然的な世界からやって来た女性を妻にする異類婚姻譚という点で共通するが、まったく別の話である。

原話①では、男性主人公である董永の親孝行と、それがどのように報われるかが話の中核である。董永は亡くなった父親の葬儀代を工面するため、みずから奴隷となる。その行為に心を動かされた天帝が董永のもとに女神の織女を派遣する。女神は董永の妻となり、夫の自由を買い戻すために機を織る。その後、二人の間に息子が生まれると、女神は天に還る。ここにおいて、董永の善行とは、父親のために自分の自由を犠牲にしたことである。これが天帝に認められ、彼は再び自由の身となり、さらに家族を得るという形で報われたというのが、表題が意味するところであろう。祖先崇拜や親孝行を重んじる伝統的な儒教の価値観に照らせば、董永の自己犠牲は息子として当然の行いであった。儒教が長男を家長として特別視することを顧みれば、董永に与えられた真の「禄」とは、後継ぎとなる息子の誕生であり、家が存続する可能性が見えたことだといえる。

原話①には、女神についての情報はごくわずかしかない。それも彼女の行動の報告に終始しており、天帝や董永との関係性にかかわる内容に限られている。彼女の内面に踏み込まないという語りの特徴は、後継ぎとなる息子を生子、夫とその両親に仕えることを妻の役割とする伝統的な儒教の女性観と重なるものである。

ハーンの再話は大枠を原話①のあらすじに拠り、それぞれの場面や登場人物の細かい設定に原話②の要素を取り入れている。本発表では、再話から4か所の場面を選び、主に原話②と再話を比較しながら、それぞれのテキストに描かれる女性の特徴を中心に考察した。

第一は二人の出会いの場面である。原話②と再話の両方において、青年は病床で謎の女性と出会い、病を癒してもらう。原話②では、主人公の趙氏が眠りから覚めると、傍らに立つ少女の姿に気付く。少女が趙氏の身体を揉んだ感触が「火の玉のよう」と言われるように、ここでは患部の血流を促し、温める治療法がとられた。美女は趙氏が回復すると、自分は妖精で、前世で世話になったので恩返しに来たと告げる。一方、再話では、最初は眠っている間に見た夢の中で、次いで目覚めた時に、董永が額を美女に愛撫されていることに気付くよう変更されている。また、董永が愛撫の感触を冷たさや甘美として楽しむ一方、美女の視線に捉えられると「漠然とした畏怖」(“a vague awe”)を覚えることも再話の特徴である。再話では、美女の正体や来訪の目的は二人の別れの時まで語られないが、結婚生活を通して董永が繰り返し覚える美女への恐怖は、女神という高位の存在に対して人間である董永が無意識に抱く畏敬の念であると考えられる。この感覚は、物語の前半においては特に、冷たさや硬さのイメージを伴って語られる彼女の美貌と相まって、その神秘的な印象を強化している。

第二と第三の場面は、結婚生活の描写である。原話②では、趙氏は貧しさを理由に結婚をためらうが、妖精によって高価な家財道具や豊富な食べ物などを与えられると翻意する。そして、夫婦となった後、二人は夜ごとに客人を招いたり、夕食会を開いたりして暮らす。再話においても、董永が貧しさを理由に結婚を躊躇する点は原話②と共通する。しかし、原話②と異なるのは、董永のためらいが美女に伝えられないことである。董

永は美女の視線を浴びると言葉が封じられてしまい、彼女に導かれるままに夫婦になることを祖先の霊に誓う。結婚後、美女はチと名乗り、機織りをして家計を支える。董永はチとの暮らしに深い満足感を覚え、年季奉公にも精を出していたが、一方で妻に見つめられると言ひ知れない恐ろしさを感じるのであった。

原話②と再話の両方において結婚は夫の問題を解決する手段となっているが、それぞれのテキストで妻がとった方法は異なる。この違いからはまた、それぞれのテキストにおける女性像の違いも見えてくる。すなわち、原話②の妖精は趙氏に享樂的な生活を送らせることで、彼の悩みを直ちに解決した。ここには、物質的な豊かさを与えることで趙氏の問題を解決しようとする迅速さがうかがわれる。迅速さといえば、彼女の人柄がうかがわれる次のような逸話がある。ある夕食会の折、妖精が客の邪な心を見抜き、「口汚くののしり、頬を打った」ところ、その客人は頭が壁を突き破り、体が窓枠にはまって動けなくなってしまったというものである。彼女が客の邪心を見抜くなり、その場で攻撃を加えたことは、趙氏の住まいを豪華な品々で整えることで、結婚を受け入れさせた時の迅速さに通じるものがある。また、彼女は邪な客をみずから罰したのであるから、その人柄は機転が利き、行動力を備えていると考えられる。

チが働くという設定は原話①に拠るものであるが、再話ではさらに、彼女の見事な機織りの腕前を強調する逸話が加筆されている。彼女はどれほど乞われても機織りの技法を他人に教えなかったとされ、反物を売った報酬で董永の自由を買い戻す。これらはいずれも彼女が人間でなく、女神であることの暗示と解釈することができるが、より世俗的な観点に立てば、彼女の態度には自分の織りあげる反物を他の製品から差別化し、価値を高めようとする戦略的な意識が感じられる。この点で、機織りは彼女にとって家事の一部ではなく、家庭の外の社会とつながり、収入を得る手段であったといえることができる。チの超人的な能力は、董永との間に生まれた息子に天才的な知能の発達という形で受け継がれるが、これもまた、ハーンが再話で付加したものである。

第四は、チが天に還る場面である。原話②は宴の最中に一羽の兎がやって来て、それを合図に妖精と趙氏が天に昇っていき、趙氏の自宅は結婚前のあばら家に戻ってしまう。趙氏と出会って早々に妖精自身が明かしたように、彼女は前世の恩を返すために彼のもとにやって来たのであった。目的が叶えば彼女が地上に留まる理由はなく、彼女の痕跡を残す必要もないため、妖精は趙氏を連れて天に還ったと考えられる。しかし原話①と再話では、織女は董永と息子を残して一人で天に還って行く。その際、原話①は彼女が帰還したという物語世界における事実のみを報告した後に、長じた息子が役人として出世し、董永自身も朝廷から親孝行の功績を認められ、保護を受けたとして、父子の社会的な成功を告げて物語は結ばれる。これに対して再話では、父子の成功譚は省略され、代わりに、別れの場面が大幅に加筆されている。そこでは、出会いの場面から繰り返し董永が覚えてきた畏怖の念や、並の女性よりもはるかに背が高くなったチとその前に跪く董永の構図によって、神と人間の絶対的な違いが表現されている。そして、チはここで初めて自分が女神であることを明かし、別れの時が来たことを董永に告げる。その際、息子の養育を董永に委ね、家族のもとを離れることが彼女自身の口から語られたことは、ハーンが再話に施した書き換えの特徴として重要である。なぜならば、子どもを残して家を去るという意志を持っていたり、それを実行したりする母親は、ハーンが来日以後に著した作品にはほとんど見られないからである。先行研究が指摘する通り、来日以後の作品で強調されるのは家制度と親和性が高く、夫や子どもに無償の愛を注ぐ女性の姿である。

では、このような女性像の背景にはどのような事情があるのだろうか。本発表では、当時のハーンが女性に対してどのような考えを持っていたのかを探るため、彼が来日前に発表した新聞記事に手掛かりを求めた。

ハーンが生まれ育ったヨーロッパを後にしてアメリカに渡ったのは1869年である。これはちょうど女性の権利や自由を求める社会的な機運が欧米で高まりを見せていた時期と重なり、女性に関する話題にはハーンも新聞記事を通して繰り返し言及している。男女平等や女性参政権についての彼の立場をめぐっては議論の余地が残るが、少なくとも“Self-Supporting Wives” (*The Item*, November 17, 1879) において、ハーンは女性が家庭の外で働いたり、夫と協力して家事や育児を行ったりすることを容認する姿勢を見せている。記事ではフランス社会を念頭に置き、労働者という点で女性の能力は男性に何ら劣らないこと、妻とは夫にとって友人と同等の存在になりうること、妻や母であることは女性が家庭に留まる理由にならないことなどが説かれている。

これに照らせば、“The Legend of Tchi-Niu”には、ハーンが“Self-Supporting Wives”で示した新しい女性像が流れ込んでいると言えるのではないだろうか。天帝や董永に献身的に仕えながら、彼女自身の内面には踏み込まなかった原話①と比べれば、原話②の妖精には意志が認められる。しかし、彼女の行動は家庭内に留まるもので、社会との関わりが見えてこない。これらの原話に対し、ハーンの再話ではチは職業を持ち、家庭の外にも活躍の場を持つ女性として描かれている。別れの場面では、彼女自身が家族との別れを宣言し、圧倒的な権威を示すことで、家事や育児を妻の務めとする性役割を見直すきっかけを提供している。このようなチの人物造形の背後には、“Self-Supporting Wives”で説かれる「自立」した女性の姿が認められるのではないだろうか。